

「2018年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール参加報告書」

京都大学文学部2年 分林寛奈子

私は本サマースクールに参加し、日本では得られない非常に貴重な経験を得ることができた。しかしそれは、楽しいことも辛いことも含めて、である。ここでは私にとって初の東南アジア渡航となった今回のベトナム研修での刺激的な日々について語ることにする。

本サマースクールの募集を発見した当初、私は「東南アジアには行ったことがないし、文学部から単位をもらえるということなら行ってみたい」と軽い気持ちで応募した。幸いにも選考に合格し、派遣前の事前授業に数回出席した後ベトナムに渡航した。今回台風の影響で関空が閉鎖となり羽田発の便に振替となったため、予定より1日遅れでのスタートとなった。ハノイに到着し、ノイバイ空港を出た瞬間、耐え難い暑さと湿気に見舞われ少し気が減った(夜だったので幾分マシではあったが)。晩御飯に早速ベトナム料理のフォーを食べさせていただき、これから始まる2週間のハノイ生活に身の引き締まる思いであった。

現地でのスケジュールは、平日は授業、休日は自由観光であった。今回はベトナム国家大学ハノイ校のうち外国語大学、そして人文社会大学の学生たちと交流する予定だったため、最初の4日間は、外国語大学で日本語学科の学生が受講する授業に我々日本人学生が参加させていただいた。1年生から3年生まで、それぞれの授業に参加し学生たちと日本語で交流をしたが、我々は彼らの語学力に脱帽した。もちろん1年生や2年生は片言の学生が大半であるが、3年生にもなると、授業のレベルも高く、我々もまるで日本人と話すかのように彼らとスムーズに会話することができた。そのような急成長の裏には、彼らの尋常でない努力がある。あるベトナム人学生によると、平日は朝7時から夕方5時ごろまで授業を受け、その後アルバイトに励み、土日は学校の課題や授業の予習復習で忙しいため、遊ぶ時間はほとんどないということであった。学習意欲が非常に高く、学生の鑑のような人々ばかりで、自分自身の学生生活を少し反省した。この最初1週間は日本語学科の学生たちがサポーターとして毎日ホテルへの出迎えや観光の付き添いをしてくれたが、どの学生も元気いっぱいである、そして我々に非常に親切にしてくれた。

2週目は人文社会大学日本学科の学生たちと交流したが、彼らは語学専攻でないにも関わらず、非常に日本語が流暢であった。ここでは授業参加だけでなく、ベトナム文化などについて英語で講義を受けた。そして共同発表の最終仕上げ等を行い、金曜日の本番に臨んだ。

今回の派遣で感じたことは、やはり語学の重要性である。今回交流したベトナム人学生のほとんどは母国語であるベトナム語に加え、英語、日本語を使いこなしていた。グローバル化が進んでいる現代において、母国語と英語が使えることは最低限必要とされる能力であり、それに加えてもう一つ言語を習得していることは非常にアドバンテージになると痛感した。私は将来留学も視野に入れているので、これからは英語のみならず他言語の学習にも励みたいと思った。

2週間のベトナム滞在は、大気汚染や衛生問題など途上国ならではの悩みも尽きなかったが、それらを忘れてしまうほど、多くのベトナム人に支えられ、実に楽しい日々であった。本サマースクールで経験した多くのことを、これからの学生生活に生かしていきたいと思う。